

ウィーンにおける美術館を活用した鑑賞教育

前ウィーン日本人学校 教頭

沖縄県島尻郡八重瀬町立東風平中学校 教諭 二宮 陸生

キーワード：ウィーン，美術館，鑑賞，校外学習

1. はじめに

グローバルな視野に立って自他国の文化を理解していくために、美術教育が大切である。美術文化には国々の自然と人と歴史とがリアルに表現されているからである。なかでも、鑑賞教育は重要である。美術鑑賞は様々な国々を理解する入り口となるからである。また、その国の時間や空間を超えた文化との対面によって、自分のアイデンティティを形成する場が得られるからである。

しかし、これまで学校で行われてきた鑑賞教育は、実物との対面というリアルな体験の機会に乏しく、未だ教室内の美術史学習という知識理解の枠にとどまっている。

さて、言わずとも歴史文化が豊富に交錯するオーストリア・ウィーンでは様々な芸術が開き、芸術鑑賞の場が多様にデザインされてきた。東西ヨーロッパはもとより、世界中の美術文化にあふれている。この地は子どもたちが直に、日常的に、豊富に内外の美術文化に触れることができる場所である。

そこで、ウィーンにおける美術館を活用した鑑賞教育についていくつか報告したい。

2. 活動の実際

(1) 美術鑑賞教室

ウィーン日本人学校では小学部5・6年生と中学部の子どもたちを対象に、年に1回、美術鑑賞教室を実施している。その目的は、鑑賞の喜びを味わい美術を愛好する心情を育てるとともに、豊かな心情を養うこと。そして、現地理解の一環としてウィーン市内にある文化施設を活用しその利用の仕方を学ぶことである。観光都市ウィーンであるから、美術鑑賞の見どころは実に豊富で、既に家族で鑑賞に訪れた美術館は多いと思われるが、この美術鑑賞教室を通して、日常的に豊かな美術作品に接し鑑賞する態度を養おうというものである。

① 平成18年度実施 11月16日

・アルベルティーナ美術館

アルベルティーナ美術館は、油絵や水彩画はもちろんのこと、その数100万点とも言われているエッチング版画およびプリント画を収蔵し、このコレクションは世界で1、2位を争う優れたものとされている。コレクションにはデューラー、レオナルド・ダ・ヴィンチ、ラファエロ、ミケランジェロ、ルーベンス、レンブラント、エゴン・シーレ、その他の15世紀から現代まで切れ目なく続くグラフィック・アートの発展を代表する有名画家の作品が含まれている。今回の美術鑑賞教室では、特別展「ピカソ=時との戦い」展を中心に鑑賞を行った。ピカソ晩年12年間の間に精力的に制作された、大型の油絵、スケッチ、エッチング、彫刻を、ワークシートつづりに沿って鑑賞した。このように大小200点を超えるピカソの作品を一度に鑑賞する機会は、まず日本では得られないだろう。子どもたちは自由奔放で開放的な作品と対面し、80歳を過ぎた人が描いたとは思えない作品群に圧倒されていた。

② 平成19年度実施 11月13日

・オーストリアギャラリー ベルベデーレ上宮

ウィーン旧市街を見守るようにどっしりと構える広大なこの宮殿はトルコ軍を破った英雄オイゲン公が18世

紀初頭に建造した夏の離宮。見事なシンメトリー的美観を見せるこの宮殿は上宮と下宮からなり、間に色鮮やかな花が咲き誇る美しい庭園が広がる。今回の鑑賞会会場である上宮は現在19・20世紀オーストリア絵画館になっていて、グスタフ・クリムトの代表作「接吻」やエゴン・シーレの「家族」をはじめとする分離派の作家たちの作品も充実している。また、ウィーンのビーダーマイヤー最大のコレクションを所蔵しており、ヴァルトミュラー等の多くの作品にふれることができる。ウィーンにいてじっくりとオーストリアの名だたる絵画を鑑賞するに最適のギャラリーである。



ベルベデーレ宮殿上宮

前年に続き、ワークシートつづりを作成し、鑑賞に臨んだ。豊富な収蔵作品を順番に鑑賞できるようにワークシートを配列し、特に終盤には、シーレとクリムトを対比して鑑賞できるようにした。子どもたちは実に丁寧に、じっくりとゆっくりと鑑賞していた。一つの作品と向き合う時間が長いいため到底全てのワークシートを終えることはできなかったが、感想文は充実した、鑑賞の楽しさを十分に堪能した思いにあふれていた。鑑賞会後、家族と一緒に再度訪れ、家族に絵の説明をしてあげたと報告してくれた子どもたちもいた。また、数名の保護者からワークシートをいただきたいとの要望があった。美術館での感動を親に伝えるほどに、美術鑑賞教室が楽しいものになったようだ。

③ 平成20年度実施 12月2日

・クンストハウス・ウィーン（フンデルトヴァッサー）

住人のいなくなった建物が改造され、古びた町並みとは違った鮮やかな建物は、フンデルトヴァッサーが自らの作品を展示する場所として、1991年にオープンさせたオーストリア初の私設美術館である。ウィーンに来て、日本を愛した現代建築家であり画家であるフンデルトヴァッサーを耳にしない者はいない。子どもたちもまた、古都ウィーンには派手すぎるしかし自由で楽しい建物を設計した人として、フンデルトヴァッサーはよく知られた芸術家である。しかし、聞いてはいるけれど足を運んでじっくりと鑑賞をしたことがない「建物」、そして中にどんな作品が展示されているか見たことがない美術館がクンストハウス・ウィーンである。今年度は、自然との共存を訴え、自ら自然保護を实践した芸術家としてまた創造の喜びを表現した芸術家として、環境問題を避けては生きられない子どもたちにぜひとも覚えてほしいという願いを込めてこの人、この場所に決定した。古い歴史が注目されるウィーンにあって、子どもたちはそう遠くない身近な画家として、自然を愛しウィーンを愛し、そして日本を愛したフンデルトヴァッサーを十分に味わったのではないかと思う。

3. 考察

(1) 常設展示と特別展示

美術館の展示には大きく常設展示と特別展示に分けられる。常設展示は美術館の看板ともいべき所蔵品をアピールするように、できるだけ落ち着いた雰囲気配置されている。一方特別展示は人寄せとも受け取られるほどの目玉商品が学芸員の意図によって並べられ、美術館の今と今後の展示理念を示しているかのように思われる。

ウィーンは観光都市。美術館を訪れる人々の多くが旅行者である。その旅行者のお目当ては常設展示作品ということになる。ウィーンに住み慣れた者への、たとえばクリムトの「接吻」が身近にあるような見慣れたという意識の持ち主へ（コピー、広告に触れているだけで本物を見ていない人もいるかもしれないが）の覚醒が特別展である。旅行者にとって予期せぬ特別展との出会いは棚からぼた餅であるが、ウィーン在住の者にとっては、近代の作品であっても新しい風として新鮮に流れ込んでくる。常設展の鑑賞者は圧倒的に旅行者が多く、特別展の鑑賞者は断然市民が多い。特別展開催当初は、きまってごった返す展示会場であるが、半ばになると、常設展お目当ての旅行者

がばらばらといるだけである。いよいよ会期残り1週間ともなると再び見損なわないようにという市民が押し寄せる。いずれにせよお目当てを鑑賞しに来館していることは同じである。

(2) 旅行者の鑑賞態度

そのような鑑賞者を観察していて、鑑賞教育に生かせる様子が見て取れた。まず、事前に図版等で知っている者が本物と出会うときの態度。日本からきた4名の婦人グループはクリムトの「接吻」を「わー、本物だ。」「思ったより大きいものだね。」「ガイドブックとは全然色が違うね。」「装飾みたいやね。」と、素直に感動を味わい、また分析的に鑑賞していた。ガイドブックなどでの予備知識がよい方向へ流れ込んでいる点である。しかし、「これは、日本の影響を受けているらしいね。」「この人は本人じゃないんやて。」と本物と向き合っただけの味わいではなく、広がり
の起点であるはずの知識が逆に想像を閉じこめてしまう働きもしている。しかし、見ていてグループ鑑賞の良さは
そうやって互いの鑑賞を出し合いながら味わい、味わい直す点だということが伺える。

旅行者の鑑賞でせつかく本物と対面しつつも、自分との対話をせず、知識だけを仕入れている場合がある。観光ガイドさんが説明する観光案内である。後でも読めるガイドブックをそこで開いているような、鑑賞者不在の知識獲得に終わってしまう場合が多い。ギュスタフ・クリムトの活動の一端を案内するウォーキングツアーに参加したが、ガイドさんの知識の豊富さには圧倒される。そしてガイドさんなりに、クリムトをこう捉えるという確固とした姿勢はさすがプロだと感じる。一画家の歴史を垣間見るには有意義であった。たしかに、鑑賞に来ているわけではないので、じっくりとガイドなしで過ごす時間はとれない。しかし、第2次大戦の戦火を免れたブルク劇場両翼に残されたクリムト、エアースト等の初期壁画は解説ぬきでじっくりと思いを巡らせたいものである。このようなガイドツアーでは絵画誕生の変遷はともかく、描かれている対象との対話は自然に閉じてしまう。画像の象徴する意味合いを一方向的に流し込まれ、見る側は「なるほどねえ」「たいしたもんだ」と言って納得はするものの、ここからの広がり
が閉ざされてしまったことに気づかないでいる。同じツアーでも受動的な観光と能動的な鑑賞の違いに気づきたい。

(3) 輪になって

ヨーロッパでは幼児期の鑑賞教育が積極的になされている。(オーストリアはもとより、イタリア、スペイン、オランダ、ベルギー、フランス、ドイツの美術館で対話型鑑賞を必ず目にした。マドリードの王立ソフィア王妃美術館といえば「ゲルニカ」だが、5～7団体ほどの幼児たちがあの大画面の前にとこせましと陣取り学芸員とおしゃべりをしながら、「花を持った人を見つけて!」「赤ちゃんはどうしたの?」という問いかけに、自分なりの物語をつくりあげて答えていた。)鑑賞教育と呼ばれているかどうかかわからないが、この時期に、その身の丈で名作と膝を交える機会をもっていることは事実である。

ウィーンでも同様の経験は、美術館に足を運ぶたびに経験する。アルベルティーナ美術館の特別展「モネからピカソまで」では、印象派からキュビズムまでの変遷がわかるように、多くの画家達をカバーする形で展示されていた。その中で、マックス・エルンストの絵画を半円で囲むようにして床に座り、学芸員と共に楽しそうに会話している幼児の集団があった。学芸員はエルンストの青リングや円柱にかかったマスクを示し、持参した本物のマスクを幼児に渡して何かを話していた。ドイツ語で聞き取れなかったが、マスクを幼児にかけさせて、描かれたモチーフの立場になって、その気持ちを出し合っていたに違いない。つまり絵の中に入り込んで見るという



作品を囲んで語り合う対話型の鑑賞

手法をとったのだと思った。マスクの準備一つにとっても、この絵画の前で子供たちとおしゃべりをしたい、という学芸員の思いは日本ではあまり見かけないできごとであった。実際に幼児教育の課程でどういうねらいをもっているのか今後聞き取りの必要があると感じた。

(4) 共に味わう

実物との対面による「本物」の鑑賞体験を味わわせることが普段に行われているとすれば、その教育観はどこから来るのだろうか。そのことを探究することも今後の課題である。ただ、アルベルティーナ美術館とオーストリアギャラリーの美術鑑賞教室を通して気づいたことだが、本物との出会いもさることながら、私も含め周りにいる引率教師や友だちが作品をどのように受け止めているのかという点に、面白さを感じているようなのである。いずれの鑑賞教室も子どもが書き込めるワークシートを準備したが、設問の角度や鑑賞の自由さは、美術教師の一つの味わい方を紹介していることになる。それも一人の鑑賞者の味わいとの出会である。また、鑑賞中に「私はこう思う」と友だちが発言し、「先生はこう見える」とふだん共に絵を鑑賞する機会の少ない、他教科の教師の味わいに触れることなどがそうである。共にいる者たちに、自分の素直な思いを打ち明けられるという「安心感」が居心地の良さを作りだしているのではないだろうか。この「安心感」は子供たちに失敗をゆるす土壌となっている。表現と鑑賞の図画工作、美術教科でつまづく子がいるとすれば、決まって上手下手にとらわれている。失敗をしてははずかしい、失敗はゆるされないという空気が図工室にあると、手の出しようがないのである。

本物の絵画の前で会話することは、「安心感」の中で多様な表現の多様な解釈がゆるされる場面や経験なのではないだろうか。もし、このような鑑賞によって自由な発言と解釈が育まれてゆくとすれば、美術鑑賞というものの受け止め方もだいぶ変わってくると思う。

4. おわりに

上記のように、3年間の任期中に、児童生徒を引率して、3回の美術鑑賞教室を実施した。アルベルティーナ美術館、バルベデーレ宮殿上宮（オーストリアギャラリー）、クンストハウスウィーンである。それぞれの鑑賞会ごとに観賞用のワークシートノートを作成し、それをもとに作品と向かい合わせた。ワークシートは教師があらかじめ鑑賞をした視点から設問を作成し、それに答えることで作品について徐々に興味を持つようにしてある。作品や美術館の歴史的な資料もあまり大量にならない程度に掲載し、作品鑑賞の参考にさせた。どの鑑賞教室においても子どもたちが作品に感じた生き生きとした感想が記されていた。時間的な問題や「せっかくの機会であるから」という思いから、一つの作品について重点的に鑑賞するスタイルではなく、全体的に広く浅く見て回ることになった。そういう意味では教師自身が「旅行者」的な立場で鑑賞をしている点があるからであろう。実際、ウィーンに滞在していても、同じ美術館に3度以上足を運んだとう話は余り聞かない。ましてや小学生、中学生となるとなおさらで、レポートを期待して計画はするものの、この鑑賞教室が最初で最後となるかもしれないのである。本来なら、贅沢に一点を選び取って対話型の鑑賞を行いたいところであった。あるいは、「自由に好きなものを一点」選んでもらって、それについて「どういうところが気に入ったのか」を説明する方法でもよかったと思った。いずれにせよ、ウィーンは美術鑑賞の最適の環境をもつ。幼児期からこのような場にふれさせることがどのような意味を持つのか整理をしていないが、何かを習得するという目的ではなく、歴史的な作品との交わりを日常的に行えるという「生活の豊かさ」を感じざるを得ない。